

編集後記

整形外科はここからここまで、リハビリテーション医学はあちらからここまで、などという境界をはっきり決めかねるくらい、昨今はむしろ境界領域の研究は盛んである。特集として整形外科治療の進歩という項を設けてリハ医、リハ医療従事者への参考資料を提示していただいた。我田引水であるが整形外科専門雑誌に十分匹敵する高いレベルの内容となっている。

天児民和先生は編集子との対談において終始元氣一杯、十分御酒も召されながら延々数時間を語られた。その全部を掲載することが紙数の都合で不能であり、残念である。編集子も久しぶりに面白い話、教育的な話をたくさん伺うことが出来て大いに満足した。千葉大の北原宏、井上駿一両氏の側彎症の手術療法は本邦での先駆的仕事を基に豊富な症例より語り得る総説である。また最近特に手術療法、関節置換術の成績が安定して来た股関節については黒木良克氏がこれまた豊富な自験例から解説をされている。平林洸氏ら、腰野富久氏らの頸椎、膝のそれぞれの問題も同様である。

整形外科の領域はすべての分野で最近特に発展的な点が多く、どれもが記述に値する。

そして患者の数も圧倒的に増加している。ここには述べていなかったが切断肢、指の再接着などの手術技術は特に進歩であろう。顕微鏡を使用して編集子の病院でも足趾(第2趾)を手の母指欠損に移植させ機能回復させる手術などを含め、盛んに行なっている。このような microsurgery は応用が広くいろいろな難治性病巣の修復手術に使われているのである。ただこのように学問が盛んになり、研究者が多くなるとはじめに報告した人の業績がともすれば忘れられがちになる。本邦でもいろいろ originality のある仕事があるので、いずれ整理記録しておく必要があろうかなどと考えたりしている。

講座2題も特異な題目をも含めて快調なペースで進んでいる。

研究と報告欄はどしどし読者からの投稿をお待ちしているのでどうぞ応募していただきたい。

自慢ではないが本誌の査読はかなりきびしいものであり、いろいろ投稿された方達に御不快の念を持たせることもあるかと存ずるが本誌の一般での良い reputation に免じて御容赦を。

(大井 淑雄)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
茨 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 歆
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告(第13巻 第4号)

特 集	老人痴呆とリハビリテーション	
	老人期痴呆に関する最近の知見……………岩手医大・神経内科	阿 部 隆 志・他
	老人痴呆の脳循環……………慈恵医大・第三分院	米 本 恭 三
	脳卒中のリハビリテーションと	
	老人痴呆……………中伊豆リハセンター	三 島 博 信・他
	大腿骨頸部骨折のリハビリテーションと	
	痴呆老人……………帝京大	水 島 繁 美・他
	痴呆老人のデイケア……………南小倉病院	矢 内 伸 夫
研究と報告	男子脳卒中患者の性功能回復と生活指導について	
	一性功能障害と心理的側面の関連について……………鹿大・霧島分院	川 平 和 美・他
	踏台昇降テストによる片麻痺の全身持久性の評価……………中伊豆リハセンター	窪 田 俊 夫・他
症 例 報 告	結核性クモ膜炎の2症例—深部覚障害による失調性歩行……………慶大月が瀬リハセンター	岡 島 康 友・他
講 座	リハ医に必要な全身管理	
	(4) 閉塞性呼吸障害……………国療東京病院	山 口 明
	リハビリテーション医学と性の問題	
	(4) 骨関節障害と性の問題……………国療村山病院	蕪 木 初 枝
一 頁 講 座	義肢のパーツ (4) 油圧、空圧制御膝……………兵庫リハセンター	中 川 昭 夫